

は、磨散がその名として記さるゝは、少しも疑なきことなりとす。

②③ 新唐書本紀開元四年六月癸酉の條には、「大武軍子將郝靈佺殺突厥默啜」と記し、拔曳固若しくは回鶻の功を録せず。

②④ 新唐書王峻傳にも「默啜爲拔野固所殺」と見ゆ。

②⑤ *Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk, S.131.* 但し余輩は此の説に賛する能はず、何となれば *bolšar* なる語は *altyn köi* の碑文に見ゆるものなるが、(Radloff, *Die altt. Inschr. d. Mong. S. 335-336* 參看)、此の語は *bol = to be* なる動詞の未來の形なる *bolšar* の *s* が *š* となりたるものに過ぎざるべく、部族の名とは考へ得ざればなり。

茲に睿と記さるゝ部族は、唐會要には睿旻國、通典及び新唐書に白睿として傳を立つるものにして、常に回鶻・拔野古・同羅等と相連りて現はる、假令ば新唐書回鶻傳に貞觀二十一年鐵勒諸部の地に府州を置きしことを記し、回紇・多覽葛・僕骨・拔野古・同羅・思結に都督府を、渾・斛薛・阿跌・契苾羽・奚結・思結(別部)・白睿等には州を置きしこと見え、又同書薛延陀傳に回紇・拔野古・阿跌・同羅・僕骨・白睿在鬱督軍山者、東附始畢可汗と見ゆるが如し、即ち鐵勒の一部として唐代回鶻・拔野古等と共に鬱督軍山 (*ütükän*) 附近に住みしものなりとす、然も此の外に常に鮮卑種の奚と連りて現はるる睿なる部あり、魏代より知られたる地豆于の地に據り、地豆于の名の見えざるに及びて現はるゝに至りしが如し、白鳥博士によれば此の睿はトルコ種には非ずして、蒙古種に屬せるものなるが、新唐書の編者は之を白睿と混じ、遂に白睿の傳に於て「白睿居鮮卑故地、直京師東北五千里云々」と記するに至りしなるべしといふ(史學雜誌第二十三編、東胡民族考第八回)、何れにするも回鶻と共に記さるゝ白睿若しくは單に睿といふものは鐵勒種にして、種族の上よりいふも、住地の上よりいふも、回鶻・拔野古・同羅等と極めて近親の關係に在りたるものなること明らかなり。

②⑥ *Uigurische Denkmal, p. 1. Hirth, ibid. p. 133. Marquart, ibid. p. 21.* 然れども *Bugu* なる部族の名は余輩の知れる限に於ては突厥碑文中には見えず、思ふに僕固の音より *Bugu* なる名はトルコ族の傳説には可汗の名として現はれ有名なものなり \parallel を假定せしものなるべし。